

六

温泉考

全

庚 寅 甲 寅 庚 寅

盛泉堂 全

敬啟者

本堂主人

吳水全

寬政甲寅癸卯

雙桂先生著

述齋先生校

温泉考全

不許翻刻
尺叟水突

此書醫者に於て湯治の要を一考と爲て其要に盡し湯治の方と
之を以て觀し且湯治の要を一考と爲て其要に盡し湯治の方
病に依り湯治之却る害あり病に沈み又温泉にも亦さるる湯
如要の湯は三氣の湯と云ふ也

岡氏
新書

温泉小言序

平安原子公瑤以儒爲業生平足
跡半于天下親經目覩之所游著
温泉小言一篇以論其質性主療
辟就忌宜消息之法於湯泉一事
殆無餘蘊焉而名以小者蓋謙矣
公瑤沒三十年其子敬仲携來謁

予題序予公私鞅掌未暇濡毫七
何敬仲病而逝焉頃者敬仲之子
伯慶以先子遺命將梓此編復請
予言予向聞敬仲言公瑤又有桂
館隨筆及詩文集若干卷行剡傳
于世云嗚呼世之棄視先人遺籍
徒歛鼠靈者何限敬仲能顯父書

伯慶又能紹父志豈不嘉尚哉予
不及識公瑤此書固其餘緒今讀
之而歎學之淵博可以知也見其
子其孫而其為人之修亦可以想
也夫地脉有水火游子六之說原
出于西庠而

皇朝稻若水之言暗與此符矣予又

嘗讀白氏六帖。悉彼溫泉湧于地。脉温源愈出。靈液徐清。合水火之德。澤浸萬人。又宋呂愿中和州半湯泉詩。郡境水多沸。陳村泉類湯。人情尚冰炭。地脉亦炎涼。稱氏未讀西儒書。其說豈胚胎于此耶。是公瑤之或所未遠見。若存于今而

示之。其若有採乎。係書以弁卷首。
爾

寬政六年重九前一日書于抑北
小築

丹波元簡廉夫



中澤恭謨書



溫泉小言序

溫泉之在地中一炎蒸上達液
激流濕者熱者或半冷半濕者
如武之內而水火共冒則不_レ凡何
物使_レ之_レ然_レ非_レ說者謂石硫
黃為之根或曰溫泉而在必白
磐丹砂硫黃為之根乃其_レ後

平一又曰有砥石處志云湯泉余
未詳其流乎至乎近時京師香
川大冲斷能控稻若以之說以爲
地中有水火二脉其交會處乃成
湯泉之說良阜矣但六三之詞
律以一偏見而自許石道若不移
安得有人焉辨之不然乃反誌

至當年一載平安原之陰著著濕
泉小言一卷其見識堅定持論
精核間註大冲之說語而反誌
正道併余前以疑栗而水釋石
志快乎且書用圖字以便于田
夫野老之誦一可謂一片婆心矣
世之與疾山谷者景此編將何以

為考。差七月。其孫伯慶於禱而
信于世。乃就余修序。因為序之。
寬政甲寅秋端三日。醫官杉本良識



天梁 山田直大士

溫泉小言序

北山山本喜六信有按

原敬仲一日携男伯慶來。託余受
業。將故使之承其業。而類敬祖。
乃伯慶祖雙柱先生者。平女處士
也。曾遊於東涯氏之門。嘗村塾中。
諸君子莫出其右。東涯屢稱。法進

領袖寶曆中以不傷仁于唐津之
學大富傷後儒中各立家學字
本區別及於孔子完精竭神若
非朱浩物惟乃藤家之學可疑者
之乃著疑藤不從此并老益不忍
反舊時昨多是欠其為儒人多
遂別為一家稱孔子學沒後其友

人芬是章撰墓表感稱德行博學
善導能教唐津多士之稱其力之
由夫東匯者學以大儒之所譽必
不試矣芬以二儒之有固表也其言不
必慮矣以今所見存著述藏于敦沖
之家者甚多其書以博物諸條看
溫泉小言一卷雖非所究也大益于

人非不也。孩多儀論之者。老於家
冥切之類也。余往歲浸病於出羽。滋
泉一循。小書所載。方而得全。疾矣
我先賴此書。以益。吾身。是雙桂德二
近及也。時適于下。德相兄古河信臣
田。田大雅。以雙桂以門人也。與此後
竊嘉其待友之錫。果信。東涯。處

章之言實然。高詩云。我曰古人。實獲
我心。余於雙桂。二然哉。孔子沒後。門
人欲以兩車。孔子事。有若強。曾子。曾
子不肯。有江漢秋陽。陽。陽。又孟子。若
大賢。不顏子。且。不救。欲學之。曰。不願。學
孔子。從此。以降。苟。傷。服。者。必。以。孔子
為。宗。師。故。德。曰。夫子。則。已。又。董。子。知

孔子之稱世降，俗澆，人自居，祖位門
徒峙，爭其祖德之言異乎。孔子年著
辨之，推孔子所未言，吾未行而未
教，唯祖德謬之，尚式乎。孔與孔子
背，使夢天起，黃泉其謂之何。
故余學一主孔子，不敢稱某祖子某派。
仙去向他徑而奔走，疑討好，而用使

者私淑于曾孟二子，欲以報孔子也。余
亦為某非，則多焉，之當非矣。究不
分然，將立不肩，懼于茲多口也。豈固
雙柱先，余着鞭于斯乎。二十八年，前
阮年，不將一掃，老成之儀，亦可憾。與
程欲，欠典刑於敬仲，之在幸，存伯
慶有類矣。伯慶，今茲刻，溫泉，小言。

諸病をいづとも

冷痛むを脚氣ふいのなきくまひま
いむむおふ足筋骨たいきつるの之で
みのるむびくも脚氣うち身之十
き一印の病候下病使毒諸痔脱肛淋
疾楊梅瘰癧毒結毒疥癬瘰癧瘰癧
風まよ瘰癧のい多人と瘰癧一とい
かゆる類神人の血積赤血怪形不瘰
の病瘰癧下瘰癧下瘰癧一印の病とれら

乃諸病をいづとも

一又濕氣まらるる病は氣血虚
物勞倦不足は諸病もろく乃夫血法
津液の乾燥も病入脾胃虚勞咳
乃瘰癧をいづとも論をいづとも
邪熱虚熱あふ人多くを禁あし病を
きつる病やう病をいづとも
谷をいづとも病たをいづとも

諸病をいづとも

二

湯治法

とて虚功の人を治す人らうべ
おそき温泉の相急せるとお急せざる
とせざるは何の病のやうに三日
も入湯して胸ひらき腹をさ毛切
に入社食——食味ささく美ら
湯はお急せざるなり又胸ふさ
腹を食さ味さく水瀝こころ外
せくと結瀝——大便その外わく

秘法——或は頭痛を——耳のふ
こころく賊澤と依——瀉紙成瀝
はこれ湯の不相急なるをわくたぬる
をほつ一兩日入湯せやうてこころ保
養——再び又試みよ——湯を五度程
ちく入湯してそく——その時心
乃指しとちきいよく入る食味候
なるとそれ外の病とてちくちく指す

湯治法

そくごうれやると湯乃お急そらなり
世におとくハ湯に相急せり症そらあり
まろくハ湯のけをちるハ減體毒性
欲いそ成なり或も酒をのこ不養生
をなす後しそたのこく不相急の症
成ありそすもり取を先ウ二三日
湯をやうてとくと保養一その後ハ
乃通て試む存一たも通て試む

心前の通食の風味といふくあり
叙もすといふさうハ水して取りひきり
そみやうも浴湯を止む存一かるら
右害をゆわくこれ湯法人の事
入きりそり又ハ湯後四五日たると
大後調利成ハ急そらそそ度或そ七ハ
度後そそ一懐急湯注ハ氣味あり
て大後例そそ真氣つそそそある

このなすこれ湯に相意せうより太吉
事なりゆほりびいよく介傷を介
又楊梅瘡下疳の類を痔脱肛婦人
の帯下下部に病疔を乃其の病人
入湯後四五日を経て毎日下血まこと
ありりのなりこれ驚く一うん丸を
のふらふらふらだう扱てよりて万一を
湯の不相意はてらざる病もあるゆへ

小一搦まり決定なりゆはれをお
こき多事れ瘰癧血温泉に凝動せられ
てらざるおさなとく十分相意乃症を
あつてやちり兎角左指の時に熱時乃指
體氣を食事等と利あを考て若
免をさすむべきなり又淋疾の人入湯
候はるるいやく法はかくて小便血成
とぞすや巧りこれこそれとおる

ことごとくひるひの驚きをさうして病愈る
 たりふた箱の身あるふもなり
 一 おろそ入湯のほ十人並乃氣力人
 一 日三四度をわきのしすは死を
 免る人一日に五度より病人に一二
 度 ぬれ度よりよいかあらんは害あり
 相ろつちる人を玄智に七八度或は十
 二三次に浴し又ハ一時も二時も洗

壺といふも居るも徒らありこれ大
 なるあふゆりなり左箱のよりあり
 一 湯の程も湯交令一 水大ゆへ
 湯泉もゆるゆへに浴しそその氣
 づもなぐ人の肌體臟藏表裏内外
 一 通貫徹し 湯澤の物を潤す
 一 時雨に物もよくよくよくよく

湯にて向ける湯氣を宣通し
 鬱りひらきて通す一處を排し
 結を解けては利す一處を結せ
 らし寒を去る湯を去ることゆへう
 急にくくと氣をせて飲むはな
 一或は汗を叩くほと長いてとるま
 い却ち害を得る結を解す故に湯す
 時をまして湯をみ湯壺の

ほうへそうあらそのを腰を叩け
 足を湯壺まひたし湯をまにびすひ
 て而成す氣を和し人を
 平にする湯を成して兩
 肩を覆す腰の内を覆す何
 過るゆえにかのことして
 熱身れなつとあらすまはらすは
 静に湯壺の内へひきまておさし

江表集

砂も油を透りたわもねりあ時とさか
ちあかると一時も久しとひよりた
も元氣は津液枯燥大毒と
お湯をそあがせて風をあてて
湯にうまい湯に氣身を徹して空
受ては浴衣ひいて久しと空
風堂にやねらるゝことおよりのなり
そのうへりくの入湯も表氣ひ

あるは湯にうまいは風堂に
トやききこふなれくよとくは
む一なるは夜を寝らるゝ候なす
うくひり是非うゝ候とせんと
くどくも夜具を看し麻呂をい
ゆわしてふもつなま湯治の回
を禁ま一房事を勿論いよおよ
くび湯治の候もあつた暫くを

江表集

江表抄

おむ—又もき腹は滑き—又も食後
あ—もまろ—のりひ又氣うつらも食す
むも大食す—のり生冷た物も食す
空うらひどくも煮熱—たぬぬをこ
食ふ—相りも物食ふ—うらひ
は魚少す食ふ—時—近可、赤
行—氣をうつら—食を滑き—
而天に節ハ列を雨濕の氣にあ—

浴格を括む—蒼木の綿をたきて不
正の邪氣をすく—さきり免前湯浴の
肉を表氣ひらきて邪氣に防り—
中—なり朝夕に食事—透達あり
とも時とす—
指に空腹—
食—唐の陳武帝結も—入湯は
虚懸す—痛—

江表抄

七

およい飲食と心も補養をとりとらつて
これ肝要の語なり減體や性も湯へ入
るのりまてその外は飲食牙痛に養生
おろきかなれと却々大害を振く極か
の河合兼光とらふ人乃有馬の記にお
ろを湯治の人温氣をわらうそくす
おりよ少く養生は湯と先にお民
おれむべし時をけいやすのまなら

は仕置たるがはいと痛なき君達のけいよ
をのきてこの記も養生なる養生をお
ろすのまそとそあす油一ぱうをけ
唯温泉城君のこくく神のこくくおりの
て病をのそく樹を思ふ一とけけ
をさるこくす

一おすを温泉に浴して病を瘳するふい
ちいやゆる神世のいさくを和つて

こゝろて國より野語を稱乃うや
なるこゝろは河に在り天球のやうに
いささか時大に貴き宿奈彦野余と
にたゞこの豊原中津國を領せ
とありきこの民の快楽成りしれ
よひて醫藥潔淨温泉乃湯となて
あはれその疾苦をまゝいよふ時に
大に貴きゆん地例をうするこゝあり

温泉

唯

こゝろて國より野語を稱乃うや
なるこゝろは河に在り天球のやうに
いささか時大に貴き宿奈彦野余と
にたゞこの豊原中津國を領せ
とありきこの民の快楽成りしれ
よひて醫藥潔淨温泉乃湯となて
あはれその疾苦をまゝいよふ時に
大に貴きゆん地例をうするこゝあり

温泉

唯

たりその外古もみある人入浴して
 病を療せたりなりその教所もて敷
 けりしむる唐土と云ふ清の通志乃
 載するところはこれと考ふれを
 よも兼中温泉の敷百四十箇所程を
 たりその外通志に漏れざるも又い
 もつるべし唐土も周秦といふ
 よる温泉は浴せりこと何れと先く

論語乃曾點志との一なりと云ふ所
 浴一弄水する所なりと云ふ先儒の注
 釋は即ち温泉ありを指し浴せんとす
 ことなるべしと云ふは即ち此をい
 うおもに暮暮三月の沂川乃水あり
 といふ人といふことなるべしと云ふ
 このおもとすくは温泉のことなり
 といふことなりその時代の人をいふ

温泉

五

これと温泉は活をいふは、是れをいふは、
 といふその後秦の始皇帝の病ありしに
 驪山の温泉に浴せりて、その病を
 癒せりて愈する也三秦記にあらりしを
 それをいふは、後漢の武帝、唐の明皇
 等の外齊魏の帝、唐宋の臣民、温泉
 小浴せりしものなり。一なるは、これ
 とも唐の醫書に温泉の事をいふ

一、論一、その理を説く事、
 是れより、唐の陳藏器、本草拾遺
 に、これより温泉の効能をいふ事、
 ともいふ事、これより、温泉の効能を
 明らむ事、今、温泉の効能をいふ事、
 一、これより、温泉の効能をいふ事、
 に、これより、温泉の効能をいふ事、
 漁隱叢話に、温泉の効能をいふ事、

を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理
を説く——こゝろを失くたはる實もこの理

よりなるを故に今時乃醫流をくま文執
乃職とすにすれるなほは——てんを
の可不用也とてすくをなげんをわく
温泉の真理を志しひ——やみわらう
あやまり人を何やまるとの輪もさか
きま何ん以醫者とする温泉の理を
さる者もくなき人をおしくは人同
士の相法にて治せ得るも病症と

湯治一をす(き)病症(き)をなす(て)
 或(た)は苦(く)の(き)く(り)河(か)なり(ん)成(せい)ま
 大(だい)害(がい)を(ぢ)く(り)る(べ)仁(に)者(しや)これ(を)身(み)を
 營(えい)劑(じ)ば(ら)ふ(べ)し(あ)り(さ)う(へ)や

一 おも(に)諸(しよ)瀾(らん)乃(の)温(おん)泉(せん)を(み)湯(とう)を(あ)り
 地(ぢ)湯(とう)は(湯(とう)は(あ)り(ま)り(ま)湯(とう)は(あ)り(ま)り(ま)を(え)
 る(ま)又(また)温(おん)泉(せん)と(い)ふ(ま)の(を)バ(ら)な(ら)る(べ)理(り)屈(くつ)
 入(い)ら(ぬ)人(ひと)な(ら)ぬ(べ)の(病(びやう)疾(じやく)は(あ)ら(ぬ)入(い)ら(ぬ)一

き(り)理(り)屈(くつ)と(い)ふ(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)
 温(おん)泉(せん)は(あ)り(ま)り(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)根(こん)の
 理(り)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)お(も)て(温(おん)
 泉(せん)は(あ)り(ま)り(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)
 と(い)ふ(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)
 地(ぢ)中(ちゆう)に(硫(りゅう)黄(わう)あ(り)ま(り)る(ま)硫(りゅう)黄(わう)の(勢(せい)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)
 水(みづ)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)
 馬(うま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)を(あ)る(ま)ら(ぬ)一(ま)

夫須知と云書まはれらの諸説に格
 別相違せりそ其後まおりへり世に温
 泉、硫黄、又、礬石、その礬石の石
 類、あり少くは其の氣にて湧出さるる也
 も温泉乃あり所に硫黄、礬石、礬石、
 なき所、いづれもあらず、たゞ、硫黄、
 礬石、の礬石礬石、いづれも地中
 に絶るあり、そ、此、絶るの旺氣泉を、こゝ

ちむるなりと云、又、阿、説、は、暖、國、を、れ
 を、そ、れ、地、に、温、泉、を、わ、る、と、い、は、説、も
 阿、や、や、宋、乃、唐、子、面、に、温、泉、を、出、記、ま
 して、そ、世、に、硫、黄、温、泉、を、日、す、と、い、ま、
 ら、ろ、と、い、ま、硫、黄、を、い、く、ち、も、水、の、中、に
 お、け、と、い、ま、その、水、の、つ、て、あ、る、と、い、ま、
 な、し、ぬ、を、硫、黄、の、氣、を、て、温、泉、の、湧、と
 い、は、説、も、う、け、え、り、又、煖、國、を、れ

温泉湯のつらみ説ありはこれに
 國も温泉ありこれ流もとも信
 したるは之をそれ史唐の西の
 温泉といふものを天地の間に
 つけ種轉して何れは温泉の湧よ
 水は水湖も潮温泉は温泉あり
 持つてはつて志すやしては
 水は水湖も潮温泉は温泉あり

温泉のつらみ説ありはこれに
 國も温泉ありこれ流もとも信
 したるは之をそれ史唐の西の
 温泉といふものを天地の間に
 つけ種轉して何れは温泉の湧よ
 水は水湖も潮温泉は温泉あり

龍涎よりゆへに世に俗にこれを微して十人
十人をもその説は當同なりていふれど
由ひらうまおまへにたまあふし又礬石鑿
石灘黄礬石の類より漸といふ説もまよ
まぬるり又龍の吐氣を浮くとし
ハ安談を甚し辨るるまよはるる唐子西
の則是在天地間自為一類受性本然不
必有待然後温也といふまよのほつぬ

説されともこれに必是温泉の温泉
ゆへんとあぬ説よりていふれど
一帯て地子なる所とて乃の天竺或向
て是はゆりしよその中まいふることあり
太陽の輪のひらき日地を徹して温熱
をまきしその温熱の氣地中へ入て積り
乾燥をなす乾燥の地中の氣を束
してたとなすその大地熱をまきつて

ゆくものしー 湖穴の上通るよりて突出
まけて火山となり火井をさるしー又石
氣これよりゆききて硫黄もるる 泉もて
たゞ泉源ニ通る井れどもなり 温泉
るる故に大地中より湧つてお氣をたゞ
きて萬物を養ひ五金八石及諸珍
寶皆火煉よりして成るるなり 地中
火ニ近きものも硫黄もあつるなり

ゆく水子のよをまゝくれて温泉となる
世人唯地中より水あることをあつてたゞ
つてかくればよく 神異なることをあつ
てしるる 又五行の理水は方域割をれを
温泉乃津湯なるる氣うく水の形の中
に入る共にしるこの説議論精確義理
深詣卓識前者に度越すまうれ共予
愚意をいふにむすべし其の日光地

小徹して温熱を對するものと云ふと又物
 中最大なる逆きものを礎基に去くもの
 なり一由人の水その正をすこれ温泉中
 なるものと云ふを既二一層をるにほつる似
 たりとおひくお白然乃機股瑜を言す
 うまなくんといとも終よ人をして道感ふ
 ららむることもあつらひ故に今實に
 この説と表緯一又これ成に捨中

一 大極動く陽を生し脚ふして陰とす

陰氣を寒となしき事水を生以陽氣ハ
 熱致なり熱氣火を生以云ふして火を
 制可質なり散まれば陽の氣のみある
 所れいさるらち大穴實となき人火ハ
 五行之一有氣而無質其氣行于天散于
 地用于人といふ故に穴の氣散りて天地

の間ふ遊移するもの天を所つてを炎く
 赫く燃て生く乃陽氣なり地を所つて
 を温く蒸く生く乃陽氣なり天の
 氣にあらずれは物を生ずること所なり
 地の氣を所しされは物を育すこと所
 なりは志すふくそ陽氣のあつて
 凝りての形なるそ天を所つては太陽
 其のなる星體飛火なり地を所するもの

金銅木石を金鉄石火を陽燄を
 見きく燃て生く乃金石木石を
 火を所する陽氣の凝りての形なる
 故よその所つてを凝りての形なる
 此は形をなすも之もそのなり
 是氣よりて形質ありは故に野に
 積りて形なりや其の基きまいて
 ともその清く明くするなりを

漢漢として跡乃換捉漢をへる依然漢
 して後天地大虚の向漢を遊漢してあ
 炎漢と熱漢乃因温漢と熱漢の向漢を体漢在漢す
 此時もあつてをへるその陽氣漢なる
 にかまつて火の體漢なることを知漢ひは
 つて火漢を陽氣漢乃凝漢なる漢氣漢を
 是漢取漢まれば陽向漢つすれ火漢かくきて氣
 とならまありきして質漢なる氣漢となり

質漢なるを陽漢とつ火漢より體用漢一源漢論漢
 本漢向漢一標漢一源漢より二あり二ありは五
 運漢大論漢なる虚漢の中火漢進行漢其向漢とい
 つてもまをうちられは理漢をその本漢
 乃同漢四極漢の内陽氣漢のありささなる
 大氣漢のありま所漢なる石漢中漢金漢中漢樹漢中漢
 これを熱漢なるを熱漢なる火漢なるを
 ならざるを行漢いてつすびらなるなり

大地の中、靈氣の集つて火になりたるものか
きて、理の人もや世人も同じき事か、とて
その有ることをとらざるもの、天とありて
くしものを離れぬもの、地とありて、火とありて、
火乃ち靈氣なり、蓋し靈氣は地中にもあ
る、いふは、火の伏せたるもの、燃ゆるもの
の、火とありて、地中なる火所より、とて、
火とありて、地中なる火所より、とて、

地中なるものを火井とて、唐土の張善
傳物志にも、世に火井あることとて、又そ
の外に、書にも火井の中、常におのつて
火を出ずるといふ、類は、火とありて、火と
とて、富士山、同の火煙、又、積後の阿蘇山、
寺村の地中より、火とありて、火とありて、
山の谷中、火煙、蓋し、乃、硫黄山の火と
り、外、諸州、山谷、原野の、同、地中より、とて、

く煙のちちありて俗人の地獄
號する類中八五山日乃霧島相州
湯川の鍛冶屋地獄付赤地獄をの類
皆是大井の類にしてそなう地中の
陰氣伏して替一系して凝り連り津弊
して六氣を地より發せしむるのち
土の海東諸國記といふ事あり日本よ大
井の多く阿そん一とあるをそとて

乃地中の大地中穴淵をまたりて
ゆまうも乃もちく地中の水能を交
替して地より濃縮をのち先を温
泉とを常の水能を交替するもの濃
湯泉とより地中の水能を交替す
ものを鹹湯泉とす故に温泉は天地自然
陰陽乃交令水火の妙合なり
一 志うるは諸國乃温泉のち硫黄の奥

燼ありそれいづまといふは色鮮硫黄
いづ物をちり地中の陽氣土液と兼
一法い成るものより蓋一地中の陽
氣出あつて地の中地上山といふとの
不る阿これいその氣泄さのく燼
ひたく伏して聚る燼一燼と燼
沸聲として土中の地液を兼燼
これを燼一これを燼一燼と燼

黄の燼を結成すこれ硫黄至陽の燼大
熱此燼も日入る日本に硫黄の
いづも阿とその形はいてこれを燼
地をその理お乃つて燼と燼
先年薩州の霧島山駿州の富士山
故なくして土中よと火をか一燼
とて燼破一燼をとせ乃人望硫
黄の燼を火を燼燼せむと

ともそれの味ある不善なりたゞいふこと
く地中の湯氣地上の高山よりえらぐは
もれびく瘴いやく休して聚り得し
て凝り沸騰して火となすおのの膏
液を薰蒸し硫黄を結成して火
氣と硫黄といふも蒸いらく聚り
邊小高山の中火氣突發して一山を
灰にするにいとまも亦火井突發

の動よりしてその大いなるものなり
硫黄ごうり乃ち勢氣を以て火を突發せ
しといふをそのまをを知つてその中
に考へざるのあやゆまなり故に温泉
も地中陽火乃ち氣化所為なり硫黄と
亦地中陽火化氣の所為なり其の同
類論なるゆへに諸國の温泉硫黄乃
其氣のさるもこととハロとちり

一近向京都乃後藤九一乃人香川大冲
 の河うらひとて乃の薬選といふ書に
 依りしよその墳端に温泉のこころ成
 論して温泉磁黄土で沸くといふ説を
 うけりらぬ若水此説を引いておろへ
 らく地中より水乃第一の穴のちあ
 りその穴は毎水毎に生かへて温
 泉とらるといふを若水代説是なるこや

を是るり忘るれ共甚疎かりて
 是淋子六の説を拾ひしものうて
 若水はしめて唱へて説るを河うら
 ちう天竺或いは追項液といふ書
 ちれは若水い萬一これとをいへて
 その説乃暗合せしも忘れされ共太
 沖六淋子六の説をさしを忘るる
 て若水初て必しうれい説るりとお

人々を深く考へたるあやゆきなり
又た沖の説る硫黄といふものは温泉
よりよつて生ずるものなり硫黄をすま
りて是湧泉乃黄も夕津ありといふ
を是又あやゆきなりたゞいふこと
温泉も地中の陽火多て湧き硫黄
も地中の陽火土中の清液残渣一
らしくいふものゆゑ硫黄と温泉といふ

そのことをはききしる理をれ共必考す
とてろ温泉は温泉硫黄は硫黄とすべ
地中の火を母として温泉と硫黄は
なることと一故に硫黄温泉をすす
いふはもとより非なり又温泉硫黄
をすといふもあやまりたることゆゑ
温泉あり硫黄ありはもとあり硫黄
ありろ温泉のなりともあり又いふ

また海底乃泥おとくハ硫黄の臭氣を
あま温泉の澤ありといはれぬこと成
知るべし

一 志賀 香川 太沖の説も詳識しねとハ
るゝハ通天下乃温泉その類と推しき
ハむれとせしニ致さる一たもその説も出
る所の湯もちの土中のあるるハ火
るて硫黄の差別也とある事なりおよ

そ温泉乃沸出る湯のそちのお中も金
鐵鉛銅此類その外朱砂礬石磁石
毒石などの類ある所なればその湯毒
ある又この沸出るまゝの道毎乃お中に
た此類乃物さくなくぬとせよとの
氣をさうりて何をもさほす何をも觸
まざる本来真面目の湯湯なれば極上
乃良湯なりたとい天下乃水をそのもじ

といふるれども所くよよりてその美
 意臭味極寒徹冷の相違あり水は極
 相違いながらその土地次第あり温泉
 乃れ毎々相違の巧くといはれおるこ
 なるといふるをいふことよめりもなる説き
 彼既ち地中に陽火ありといふ大淵を各
 取せしゆふその言乃れ味阿そまかく
 乃こ

一

宋乃諸老先生の性理乃説き天下の合
 愚智賢不肖の相違あまこととこれ
 性の性をもと二致阿そにあひおの相
 違ひ出まらぬ深淵の渾濁よりて或は
 賢とあり或は愚とならざるの存性の性
 のゆゑなり至善中道の正なり官の
 たゆまるとおるべき道理にて温泉土
 その沸き土中の水も湯も銅鐵銀

鉛礬石丹砂礬石礬石をその二種の異
氣をうけけ異氣をを偏せして自然天然
礬陽交合水火妙合のう極のさうよそそ
の上純陽硫黃乃氣と太陰汞土乃精
とを和じを茶て沸ゆる温泉是を接上
くの皮湯とす故る或は鐵屑の眞氣成
なりその外種々の異氣あるをよろ
りけ眞氣とて硫黃の氣ををよろり

それともあるを甚しきよもくくこの湯を
ことなり又その味或を苦く或を酸く或は
塩け種々の異味あるを甚しきその
四五種とて酸きと別りけいた物の味
乃湯をかうけけ小瘡梅毒の類の虫
毒をを裏においこみて愈すものなり
ひんがしの湯は滑きものなりは是を解毒
乃酸湯なり味をさして白湯とのむよ

ひくき以て又もろく陸地の向
くもよりこの外ははるかにおろし味
もふゆるを又この偏さるるをより又その
色或を黒く或を赤く或はもく異池
あるまよふありやうを色まよふ潔白水の
ごころをよりごほ或を又をこり黄色
ご事にもより是も赤黄色をよごすも
ろくともおろしなるをこのまよふことより

一故に諸國の温泉所を一所に湯壺の
とらしある所あり土地のむら所なり
てその湯は差別あり相違なるは
湯壺と湯壺と相違なく相違なく同の
所つてその湯の性たは相違をい
あり是々の見す地中の穴にたれ火
なる其湯となり水も如く相違或を
又お中よりてよごる湯となりて後そ八

湯はくわくをたふるをうくも相違ある故を
肥前温泉山の上は湯壺いらしむあり
その湯壺乃おるをい、伸く四五間或は
八九間のあつたり、伸く是く湯壺は
所のいよゆへその湯壺は差別あるゆへ
きこひあるを、其湯の色茶汁をえ
るにこくあり、湯壺は又も思ふに
あり、磁汁のこくあり、その湯壺極熱

まて人の浴をき、湯壺あり、土人に非ぬ
名つけて地獄といふ浴せぬゆへ、その性
熱い志き、其とも色茶かこのこと、大お
速あり、それと、その性のお速く決定を
是湯壺の所乃土氣にお連なり、湯壺
地中の穴も相違し、なり、其をき、その
湯壺く、水壺の相違或を土中より
湯となり、後その湯壺く、を著る前

くは相違ありて人々の色は相
違あり 州城崎乃温泉も新湯も瘡
湯もその所をいれず代所をいれず新湯は
瘡を治す瘡湯も瘡を治す受陀羅湯
東漸も瘡を治す西漸も瘡を治す
右も理をいれず左も理をいれず
右も湯の湯の湯くちりふ人なり 日くす
大は相違ありて人なり

一 相温泉のありて熱きをいふは又
ぬきもいふなりをいふはぬきもいふは又
相熱するなりとも香の太沖の説に
温泉は熱熱のものなり 湯は熱熱
熱熱人の元氣を助け元氣を治す
て沈病を起し瘡癩を殺すといふは
笑ふべき甚しきなり 元氣を助け
元氣を治すといふは字を下すなり

ゆれりききてお尋る湯の阿のつらひぬ
るりるりあれて温柔和煦既と昔
て後腹藏礼膚表表内外煦温腹
以氣やととくやゆき湯を極よく
の良湯と評すふささる筑前のも原
篤信も熱湯をを浴すふら温
さふらととといへりゆきととと
す二

一 流筋の國三差天祥乃兼温泉あり
村の名を武蔵といふその温泉まことに大の
温泉のことく異氣を極く其身異味成
革は自然天行の好のまゝなる湯のま
破黄乃其氣を帯てあつらひぬあつ
ばよりあれて温柔和煦既と浴る温腹
藏礼膚表表内外煦温腹の氣やとと
一 やゆす頻と浴られも肌膚乾燥せむ

疥癬梅毒の諸瘡は之を治すに湯を
 用ひて毒を排せしむ。瘡汁を洗ひし
 諸瘡は之の外に之を治すに湯を
 用ひて毒を排せしむ。二七〇三七〇の
 湯は氣味も平愈す實に
 皮膚の皮湯よりそれより入湯乃
 人々近國より行はるるありしに湯泉
 の理を述べて人々鬼や神也評論しつげ
 實馬をの湯より、格別におこるる湯

此の湯泉は多きを治すに湯を
 用ひて毒を排せしむ。耳を洗ひて目
 を洗ひて目をやしませしむ。近き
 湯泉は之を治すに湯を
 用ひて毒を排せしむ。一むう
 釋大蓮禪と云く此湯は湯治
 るるを治すに湯を
 用ひて毒を排せしむ。壇の浦

夜憶返郷終入夢 晴望孤島小

一尋西府温泉地

治病逗留及兩年

とふ詩を作す。や無題詩集の中に
見くると西府とを鎮西府の事。一々
武藏の邊を鎮西府乃古跡なりを
いひ以湯いふ。一ハミトの外雙見せし湯
きて近國のみならずは天下にひくく石湯
ほく敷方よりもころくと湯山を狹て
湯治も見たり。温泉や又くたう又

見原箱の云或説

齊明天皇十座の郡朝倉乃行宮うと
まると玉ひし時むす。村も村も幸ありて
御湯治あり。と云とつり又古今和歌
集に源のさ林とつり如都よと荒雲湯
治とつり。よかみさひの湯とて

んやそのるなるくよたわし
いさうし。とつりいさかしのなを

といふをよみし中又々々を以て流る
湯治せし湯治くしとくうりあつて
りしもの温泉れとくもけさうさうのけ
うしとくはさきこころ喜ひしし今
九州に温泉所ふ甚多したれは
つきの温泉のこころを極めのくられし
の遊禪をくくし武藏の温泉を治し
とくし頼推されしは湯治せし温

泉も武藏なりし

一その所乃人れしは又々をいし
虎麻呂と人ありしれ女癩ありし
いをりしとくしに温泉を浴せし
その疾もなりし平癒しとて設し虎麻呂
せし湯を經營し取建ししとくし
のこころをいしとくし浴者絶へしとくし
虎麻呂の本宅を古賀村の因すた

れ云ふありしや今も其宅乃
跡あり又温泉此近邊に虎麻呂建基の
薬師堂あり林花山武藏寺と號すそ
の寺此側る虎麻呂の墓あり元表虎
麻呂といふ人正史舊記よりその事ゆゑ又
ありしぬ人四人といふの一人なりゆゑ
ありすれすは武藏寺と建基せし人な
れはそらうよ少き世の人と見えしを此

武藏寺と虎麻呂建基せし事をも
貝原翁といふ又貝原翁の説もいふ
一はは寺大寺にて堂塔も多くは院
もあふく河くくも一宇治拾遺下巻
乃二出家功德の隆き菟堂の武藏寺の
事と見えしを以て寺のことあり又元亨
釋教ふつう一は菟堂の武藏寺安樂
寺觀世音寺にて毎年正月七日追儂

せしと所々も此書のとすなりといへり

温泉小言跋

寛政癸丑夏曝家祖雙桂先生遺稿
余就其中歎温泉小言先人曰凡
世之浴温泉者皆不得其方故不啻
不能愈其疾也鄙或添一等瘦歸也
温泉豈不亦誤乎今刻此書以傳世
其裨益也不小矣先人慎然而歎

曰嗚呼思不起耶乃祖多年研精於
孔子學研著述若非朱詰物類蘊珠
泗徽響四書指斥三家疵癘等或卒
業或去脫草不幸即世余歎嗣其志
然少已委質就官公務殷繁加之以
多病故未果也如此書其後也昔者
乃祖痲疾於溫泉遂格至人志如乃

祖之博學多識叩以溫泉事乃祖因
據古禮令語之徹夜於是主人大悅
于時吾在傍而聊藉之身乃祖豈肯
意於行諸世乎然令鑿之版則思非
乃祖之志也雖然濟世利人乃祖之
所歎也與深旅于葦中而飽蠶魚之
腹孰上木以益于世於是乎將謀刺

○溫公書疏
廁之事無何杖八月先人燕沒嗚呼
哀哉家祖即世十令二十八年矣余
未得及倚負劍面受教誨先人三年
未五十而上先人不能成其業也吳
大其何人慨令茲甲寅夏六月乃刺
溫泉小齋竊嗣先志因舉先人之語
謹此以獻全家祖德業學術止山先

生存具盡之令亦不敢贅云

孫 善伯履盟嘯再拜謹撰



五瀨漁夫稻負隆共吉書



雙桂先生著述目錄

傷寒私斷 十冊 桂館詩軌 二冊

溫泉小言 白雲堂考 一冊 過庭記談 翻出 五冊

桂館野乘 翻出 八冊 轉音折義 翻出 二冊

桂館隨筆 翻出 十冊 雙桂文集 翻出 三冊

雙桂詩集 翻出 三冊 三家疵痕 翻出 八冊

洙泗微響 翻出 五冊 漢津六帖 翻出 六冊

書賈 江戸漢草子町二丁目 碩原屋伊八



